

2017年度言語文化研究会主催講演会報告

題名：「日本語教育の現場－多文化共生社会実現に向けてのNPOと行政の協働から－」

日時：2017年5月16日（金）16時35分～18時5分

会場：東京女子大学9103教室

講師：佐藤佳子(NPO 法人中信多文化共生ネットワーク、松本市多文化共生プラザ・コーディネーター)

<概要>

本企画では、松本市で行政やさまざまな機関と協働しながら日本語教育に取り組む佐藤氏をお招きし、日本で暮らす外国人女性たちの現状について伝えていただくとともに、日本語教育を受けることで彼女らがどのように変化し、社会で活躍をしているかを複数の事例をもとに紹介していただいた。また、自らのキャリア形成に関しても詳細にお話いただいた。最後に「求められる人材になるために教える力をつけてください」という言葉とともに、前に一步を踏み出す大切さをメッセージとして伝えていただいた。また、佐藤氏には、参加学生が書いた振り返りシートに対し、後日、詳細な返事を送り返していただき、それを参加学生に伝えた。(松尾慎)

題名：「日本在住外国人の生活と言語的支援－難民支援の現場より－」

日時：2017年6月9日（金）16時35分～18時5分

会場：東京女子大学9103教室

講師：鶴木由美子（認定NPO法人 難民支援協会）

<概要>

本企画では、難民支援の最前線で日々活動している鶴木氏をお招きした。世界の難民の状況、日本の受入状況について説明があった。2016年度、日本では10,901名の難民申請者があったが認定者数がわずか28名しかいなかったこと、認定を受けるために膨大な資料とそれを作成するために何名ものスタッフが必要となること、日本の難民政策は管理の観点が強すぎるが、保護の観点をもう少し強調すべきであることなどが訴えられた。その後、難民支援協会の活動や学食で難民の家庭料理を提供し売上金の一部を難民支援に利用する Meal for Refugees などが紹介された。また、グループ活動を通じて、「日本や世界では難民に対するどのような政策、対応が必要であるか」に関し、学生が自らの

意見や考えを発表する機会が提供された。

(松尾慎)

題名：「日本語教育初級クラスのモデル授業及び日本語学校で働くということ」

日時：2017年10月27日（金）16時35分～18時5分（第一部）18時5分～18時45分（第二部）

会場：東京女子大学9103教室

講師：金子史朗氏（友国際文化学院教務主任）

<概要>

日本語学校で大学や専門学校に入学することを目指している留学生に対する日本語教育に長く携わっている金子氏をお迎えした。第一部では日本語の模擬授業、第二部では日本語学校で求められている人材に関する講演をお願いした。模擬授業においては、本学学生を初級の日本語学習者に見立て、文型項目の導入、基本練習や簡単な応用練習の流れを見せていただいた。周到な準備と経験に裏付けられた授業展開を参加者一同、体験した。金子氏には2012年度から6年連続で模擬授業と講演をお願いしているが、何年か連続での参加者も多かった。また、第二部では、質疑応答を行い参加学生からいくつかの質問が出され、金子氏は丁寧な回答をしてくださった。

(松尾慎)

題名：学習者のコミュニケーション能力を考える－中間言語語用論の視点から－

日時：2017年12月12日（火）10時55分～12時25分

会場：東京女子大学24301教室

講師：清水崇文氏（上智大学教授）

<概要>

清水崇文先生は、ロンドン大学で博士号を取得後、現在は上智大学で教鞭をとっている。ご専門は語用論や談話分析の観点からの第二言語学習者のコミュニケーション能力の習得・発達の研究である。著書は多数あるが、2017年3月に『コミュニケーション能力を伸ばす授業づくり 日本語教師のための語用論的指導の手引き』というご著書をスリーエーネットワークから出版している。今回のご講演では、外国語でのコミュニケーションに失敗する主な原因を3点ほど引き合いに出しながら、言語運用における語用論的側面の重要性についてわかりやすくご解説いただいた。清水先生の熱い語りに、先生のライフワークでもある「運用」をいかにして教える対象にしてもらうか、どうすれば学習者が「運用」を学べるようになるか」という問いの探求の意気込みを目の当たりにした参加者も多かったのではなかろうか。

(森 博英)